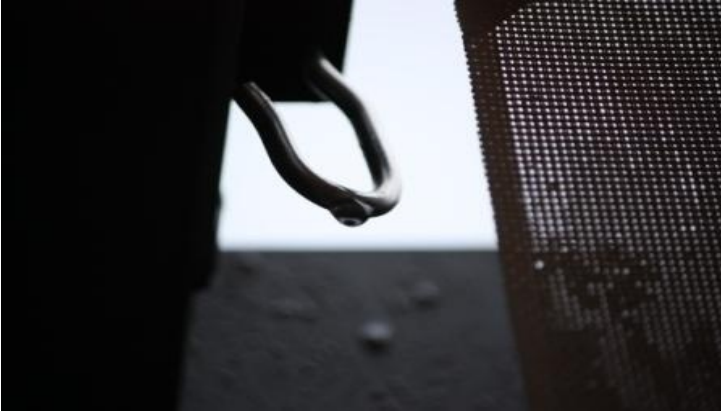


## 七月の短歌

---



足音に バッと飛び立つ鳶の群れ 息をのみ 目を合わせたね 初めての海

チョコミント レゲエ 夏フェス 高速運転 四十過ぎて 初体験の夏

暴りたい 声ならぬ声 ぶつきたい 君に届かぬ 心むなしく

暗闇に ただいまの声 息吹き返し 貼り付けた笑顔で 子らと夕食

待てど暮らせど 鳴らぬなら いっそ携帯 沈めてしまおか

本当の 気持ちはいつも 届かない 指がうつのは 満月キレイ

触れもせず 心も遠く 壁作り それでもメールを くれるのはなぜ

いっそ全てをないモノに背中をむけてくれたなら私の明日も見えてくるかな

会いたいとは書きません 百回心で唱えても 百一回目に 指が疼くの

どうせなら 身体も一緒に 奪って欲しい 心だけなど かげろうのよう

私から 会いたいのとは 言えないの 強がらないで 早く言ってよ

帰り際必ずチクリと意地悪くそれはあなたの寂しさなのかな

寝ても覚めても 君の事 考えるのは辛いから 無心に刻む 玉ねぎ三つ

逢えないと 百の言い訳 いらないわ 逢いたいと たった一言 欲しいだけなの

もう一度 煙草を吸いたいと 思う夜 あなたと同じ 匂いになるなら

真っ黒に 日焼けした肩 濡れた髪 娘が放つ 塩素の匂いと 夏の訪れ

あてのない 逢える日待つのが 辛いから またでいいよと 笑顔で強がり

久しぶりに 会ったというのに君の手は iPhoneに夢中で 私には触れもせず

別れ際 笑って帰れと 言うけれど 泣き顔になる 時間(とき)しかくれず

さよならと 書いたメールを 何度も消して 送信ボタン 押せずに一夜

一週間 ほかの予定が かすむから 言わないでもう 「会えるかも」とは

波返す その瞬間の澄む光 子に名す君の 深き会い知る

## 八月の短歌

---



君からの おはようメール見た瞬間 眠気吹き飛ばす 8月の朝

すぐ横で おはようおやすみ囁く日 きて欲しいのか 欲しくないのか

iPhoneで 子供みたいに 遊ぶ君 頬をつまんで 拗ねてみせたり

この先は わが身ひとつで 生きていく両手広げて 持てるぶんだけ

一緒にね 過ごす時間が 増えたなら 話さなくても 想いは同じ

仕事中 私の匂いが つかぬよう 選ぶ汗どめ 無香料

力こめ ほどけぬようにと 結ぶのは 烈火にとけぬ 君との縁（えにし）

漂わす 空気の中に 我が声を ただそれだけに 4年もかかり

ぷっくりと 蚊に刺されし 君小指 爪でばってん 私のしるし

すぐ近く 君がいること 知っていて 会うことができず 一人車中で

電話待つ 毎日にだけ したくない でも無視できず 君の着信

深呼吸 気持ち切り替え歩き出し 途端に震える着信君から

来年の 二人の未来語るより 今聞きたいのは 明日会える？

緑濃く 田んぼ広がる添付 写真君が感じた 夏を嗅ぎとる

君の香を この身にまもっていたいけど 全て脱ぎ捨て エプロンつけて

夏風に あたりて散歩 君あてに酔いに預けて 想いをのせて

牛のよに 猪突猛進しないから かわさないで よひらりひらりと

期待だけ ふうせんのよにふくらんで 約束なんて ひとつもないのに

吸いかけの 煙草をちょっと持っててと 私もひとくち吸っていいかな

私には 君は特別なんだけど きみにとっては タダの友達

心地いい 関係なんていらないの こわれるくらい 抱きしめていま

君の声 耳が憶えているうちに 持ってゆきたい 夢の中まで

お互いに 隙間を埋める関係だから あてにするなと あなたは言うの

深い夜に 君の手だけを 探してた 気づけば一人 月も隠れて

もういいよ 会わなくていいさよならと 言ってしまえない 私の弱さ

見たいのは 君の眩きだけなのに @追いかけ いらぬヤキモチ

## 八月の短歌その2

---



玉どめ はとうの昔にほつれてた ただ未練の糸 巻き取れずに

落し物 拾う者あり踏みしだく 者ありてこそ 人の縁（えにし）

長き夢 覚めたる瞬間（とき）は あっけなく ただ一粒の涙こぼれず

度の合わぬ メガネにそっと手をかけて サッとはずした 友に感謝

君と見た サーモンピンクの夕焼けは 瞬きする間に 光うしない

君だけの 居心地良い時 作るほど 私はどんどん 息苦しくなり

突然の 嵐に遭いて 逃げ場なく 避ける軒なく ただずぶ濡れで

唐突に 涙溢れて びよーびよーと 流るるに任せた三ヶ月分

私たち 求めるモノが 違ってる 背中合わせて むくもりもとめ

胸の奥 潜む小さな 寂しさを 埋めよと求め 寂しさが増し

独りでも 立ちて歩ける 強さをと 踏みしめるほど 沈む我が未知

路地裏でうずくまりて泣く君の肩抱きしめたし我母でなし

まだ今は 思い出になど できないの 全てを預けた 君との口づけ

いたずらか 宿命なのか 偶然か 君と出会った 意味だけ欲しい

君と僕 出会うはずない交差点 どこで振れた パラレルワールド

お互いに 何か違うと 気づいてる 口火切るまで 寂しいかけひき

熱をもつ 臉にのせる 蒸しタオル 冷めるとともに あきらめになる

暇な時 寂しい時 に空いている コンビニ女と 思っているの？

ピンポンと チャイム鳴らすも 返事だけ 目を見て話が したかったのに

夢にまで 待ちわびていた この瞬間（とき）が 零れ落ちてく 指の隙間を

眠ってる 君の背中 に顔うずめ愛しさ募り おでこぐりぐり

流星が 落ちてくるのを 待ちながら 君も一緒に 落ちてこないかなあ

潮風に 煽られ火種 揺れたるは 君への気持ちと 線香花火

痩せ細る 父と話せず 病室の 窓から見える 電車は赤色

大雨の 中ひた走る だろう君 どうか無事だと 祈るしかできず

暑過ぎて レンズ曇って 前見えず 遠くが見える メガネプリーズ

疼く胸 抱えて眠る 夜いくつ 明けない夜は ないなんて嘘

恋なのか 妄想なのか 境目が 揺らいできたよ 一休み一休み

果てなんてあるような気がしないのよ 諦めと涙の砂漠以外には

知っているあの日の私の肩掴み行ったら泣くよと止めても無駄だと

ひとつ月 見上げていれば 夜はさみ 同じ想いで いられるものを

唇を 合わせる時は 短かくて 君の左手 そっと触れたの

大好きと 君の背中に 顔つけて 眩くかわり 声に出すギューッ

子供らが 不在の朝に 花つけた オクラの黄色 写真に残す

朝食は キミの嫌いな 納豆どんぶり 多分キミには 会えない日だから

バイバイと 手降り前だけ 見て歩く ちぎれた心 キミに預けて

現実の 私の場所は ここである エプロンのひも 縛り直すも 心は縛れず キミのもとまで

君に会う までの時間は かたつむり 二人の時間（とき）は マッハなのに

半月の 輝き眩しく 想い馳せ 私がキミの 半身だったら

元気かな 歌ってるかな 笑ってるかな かなかなと 蝉に誘われ

君からの メール何度も 読み返し 黒い不安を 吹き飛ばす日々

忙しく バタバタ過ぎる 一日の 終わりに私の 名前を呼んで

「かみさんが」キミ口にする その響き どこか優しく 胸が苦しい

だって好き なぜか好きなの 眉毛がね 一本長く伸びてても

この先も 緩く甘やか 凧もなく 続くわけない わかってるけど

病床上で 母がせがんだ メープルパン 選ぶ指先 かすかに震え

進もうと 足もがけども 泥深く 掴む手もなく 宙を彷徨う

夫たち 笑い話にする 妻の愚痴 ホントは愛の 裏返しでしょ

かるうじて 家族の絆 繋いでる 父娘の笑顔 冷える我が心

友達か 恋人なのか 妻なのか 幸か不幸か 出会ったキミと

今日もまた 鳴らぬ携帯 もしかして 君との恋は 夏の逃げ水

おやすみの 最後続く私の名 胸苦しくて いまだ眠れず



君発す 言葉ひとつに 浮き沈み 木の葉の如く もまれのまれて

あきらめの ゲージ満タン その時は 全部断ち切り さよならするよ

糸切れた 凧のように 飛んで行く キミ漂わす 空になりたい

愛しいよ 怒っていても さりげなく 私の気分を 変えちゃうキミが

じゃあここに 帰ってくるねと 君がいい おかえりなさいと 言えず俯く